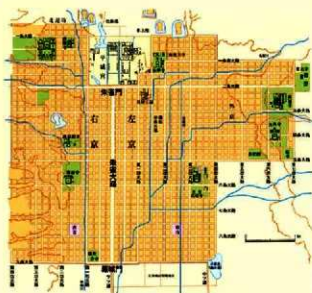




平城宮

朱雀門

奈良文化財研究所



平城宮における朱雀門の位置

朱雀門と平城宮の朱雀大路

7世紀にできたとされる古代の街道「下ツ道」は、藤原京からまっすぐ北に延びて平城宮の正門である羅城門につきあたります。羅城門をくぐると、幅75mもの朱雀大路がまっすぐ北へのびていました。街路樹として柳の木がうえられていたといい、羅城門から4km先に平城宮の正門である朱雀門がそびえ建っていました。

朱雀門の左右には高さ6mの築地塼（土を突き固め造った塼）がめぐり、約1km四方の広さをもつ平城宮を取り囲んでいました。

朱雀門の前では新羅や唐といった外国使節の送迎をおこなったり、時には大勢の人びとが集まって歌道などのイベントもおこなわれました。正月には天皇が朱雀門まで出向き、新年のお祝いをすることもありました。

朱雀門は衛士によって守られ、いつも開いていたわけではありません。宮の正門としてその雄姿を誇示していたことでしょう。



朱雀門前での歌道の様子 (イラスト早川和子)

朱雀門の発掘調査

朱雀門の位置と規模は、1964年度の発掘調査ではじめて確認されました。その後も数度の調査を重ね、1989年度には復原整備を控えて、全面の再発掘がおこなわれました。

明らかになった朱雀門は、柱と柱の間の中心間距離がいずれも17尺（約5m）で、正面5間（約25m）、奥行2間（約10m）の規模をもちます。

門の建つ基礎（基礎）は、掘込地梁という技法で丁寧に固められ、自然石の礎石だったことが判明しました。また出土した屋根瓦から、藤原宮に葺かれた瓦が再利用されたことがわかりました。



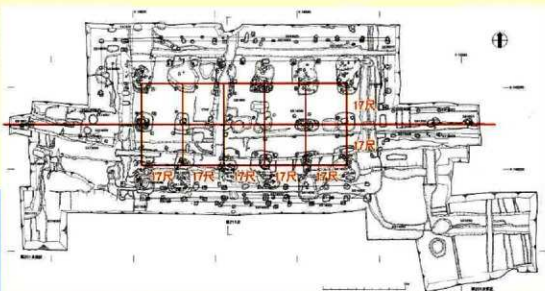
出土した礎石断片
（約2m×1.3m×0.6m）



出土した軒瓦
（藤原宮の瓦が再利用されていました）



1990年度の発掘調査（東から）



発掘調査遺構図
（発掘調査でわかったことを、図面に記録します）



1990年度の発掘調査（南から。人の立っている場所が柱の位置）



『伴大納言絵詞』に描かれる平安宮の朱雀門
(これを根拠として平城宮の朱雀門も二重門と想定しました)



法隆寺中門 (7世紀末建立)



薬師寺東塔 (730年建立)



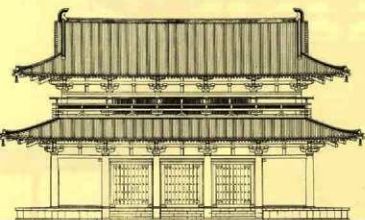
東大寺転害門 (8世紀中頃建立)

(技法・意匠を参考にしました) (奈良時代の大規模建築の実例として、各部材の大きさや比例関係などを参考にしました)

朱雀門の復原研究

平城宮朱雀門の構造に関する直接の資料はありません。今回の復原では平安宮朱雀門が二重門であることなどから二重門と想定し、その基本構造を、古代において唯一の遺構である法隆寺中門に倣いました。朱雀門は奈良時代前期の建築ですので、様式は同年代の薬師寺東塔を参考にしました。そして、朱雀門の規模が大きいために、各部材の大きさや比例関係などは、近い条件をもつ東大寺転害門も参考にしました。

復原図を描き、それにもとづいた模型を製作し、さらに検討を重ねます。そしてようやく実物大での復原にむけての準備が整います。



復原立面図

(発掘調査と現存する建築から推測しました)



1965年に製作した1/10模型

(模型の製作を通して、さらに検討を重ねます)

細部意匠の復原

構造と併行して、細部の意匠も検討を重ねました。軒瓦のデザインなどは出土品に倣いましたが、詳細がわからないものも多くありました。これらは他の遺跡から出土したものなどを参考にし、復原をおこないました。

たとえば屋根の細部は海竜王寺五重小塔を、風鐸は四天王寺講堂出土品を、尾垂木の木口金物は薬師寺出土品を、鵄尾は唐招提寺金堂、柏原市太平寺出土品、難波宮出土品などを参考にしました。



◀復原した朱雀門の風鐸



▲四天王寺講堂出土品



▼原型製作 ▲検討



◀完成

鵄尾の復原
(唐招提寺金堂などを参考にしました)

朱雀門の復原工事

朱雀門の復原は、1989年度の基壇復原からはじまりました。1992年度に、基壇は完成し、朱雀門本体は1993年度から工事を始め、約5年の歳月をかけ、1998年度に竣工しました。

復原朱雀門には、18本の柱（各々直径70cm、長さ5.3m）のほか、全部で約1000㎡の奈良県吉野産など国産の檜が使用され、屋根には約4万2000枚もの瓦が葺かれました。



基壇の復原



建設用覆屋（庫裏棟）の組立
（建設時の足場とともに雨風を防ぎます）



木材加工場
（使用した木材は奈良県桜井市で加工しました）



木曳式
（建設前の建築奉仕）



竣工式典



瓦を葺く



丹塗りをする
（3回塗り重ねました）



垂木をかけ、屋根をつくる



柱を立て、頭貫で繋ぐ



組物を組む
（柱の上に梁材を据えあげていきます）



組みあがった初重



二重を組む



上構式

復原設計と構造補強

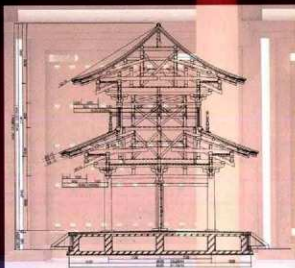
奈良時代の建物はその時代特有の構造的な弱さがあり、現代的な構造上の安全も確認されているわけではありません。復原朱雀門には現代の建築基準法が適用されます。そこでまず純粋に奈良時代建築の骨組みを考えた上で、必要に応じた補強対策を加えることにしました。

補強にあたっては、奈良時代の朱雀門が今日まで存在し続けたと仮定し、そこに加えられたであろう中・近世に開発された工法をできるだけ隠れてみえないところに取り入れ、伝統的な木構造を保つように工夫しました。

具体的には、屋根裏にX型の補強（筋違）を入れ、初重の壁には内部に木枠を組んで、その中に金属板をはめこみました。



補強材の入った二重の内部



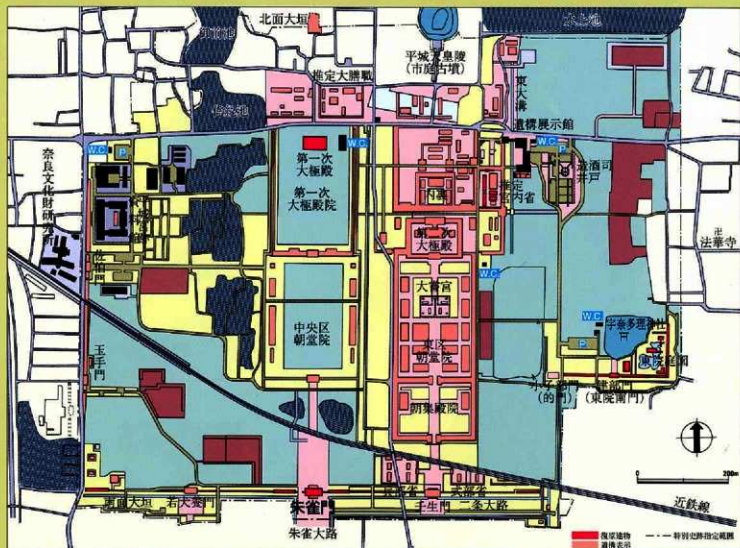
復原実施断面図

(建物の安全性を考慮し、隠れてみえないところに補強を施しました)



初重の壁内

(内部には木枠を組み、金属板をはめこみました)



世界文化遺産 特別史跡 平城宮跡

平城宮朱雀門 調査・整備略年表

年度	記事
1964 昭和39	北半部の発掘調査で朱雀門の位置・規模を確認 (平城第16・17次調査)
1965 昭和40	1/10模型を製作
1979 昭和54	南辺部の発掘調査 (平城第112・11次調査)
1980 昭和55	組物の原寸大模型を製作
1981 昭和56	門の西の大垣の発掘調査 (平城第130次調査) 門の西の大垣を復原
1982 昭和57	門の東の大垣の発掘調査 (平城第143次調査) 門の東の大垣を復原
1986 昭和61	「平城宮朱雀門の意匠と構造に関する研究」開始
1989 平成元	朱雀門の基礎復原が決定 再発掘・基礎整備開始 門前面東西隅部分の発掘調査 (平城第201次調査)
1990 平成2	朱雀門全面の再発掘 (平城第211次調査)
1992 平成4	耐震壁の実物大実験を実施 朱雀門基礎の復原完了
1993 平成5	朱雀門本体の復原工事開始
1994 平成6	立柱
1997 平成9	上棟
1998 平成10	竣工
2000 平成12	朱雀門に取り付く南面大垣を復原



- 近鉄「大和西大寺駅」北口から徒歩30分
- JR奈良駅・近鉄奈良駅から西大寺行き、
または近鉄大和西大寺駅からJR奈良駅行きバスにて
「平城宮跡」下車、徒歩20分
- JR奈良駅・近鉄奈良駅方面から
バスにて「二条大路南四丁目」下車、徒歩3分
- 入園無料
- 開門時間 9:00～16:30
- 閉門日 月曜日 (月曜日が祝日の場合はその翌日)
年末年始、その他特別の場合

平城宮 朱雀門

発行：一画1998年3月
六画2010年3月

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

TEL 0742-30-6753 FAX 0742-30-6750

インターネットホームページ <http://www.nabunken.jp>